

バカとオーズと七人の 女神

オーズ・ジャニケル 3

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

お試し版です。

連載するかは未定です。

バカとメダルと王の戦士

目

次

バカとメダルと王の戦士

文月町『鴻上美術館』。

既に時刻は夜を回つて、人々は寝静まつてゐる。そんな中、二つのライトが美術館の絵画を照らす。

この美術館は本当に閉まつてゐる筈なのに何故?

答えは簡単であり、彼らは美術館の警備員としてバイトをしているからだ。

世の中は単純なもので、疑う心をあまり持たない文月町では、彼らの正体を知らず雇つてしまつた。

ライトが上下左右と辺りを照らしてゐると、片方の警備員が不安げに声を漏らす。

「あ、兄貴、本当にあるんすか?見つかつたら俺達」

「馬鹿野郎!見つからない為の警備員だろうが。それに、俺達の目的は此処にあるんだぞ?」

「そ、それはそうすけど……」

でもなあ……と低い姿勢でキヨロキヨロする後輩にため息を漏らす。
アルバイトなど自分が目指す泥棒の柄じやない。

それでも、彼はそれを堪えてまでも盗みたいものがあつた。

——欲望のままに

ライトの灯りを頼りに進んで行く内数分、目的地である扉の前へ無事辿り着いた。

「先輩！やりましたね！」

「ま、俺達にかかればこんなもん訳ないさ。それよりマツ、お前は此処で見張つてろ」
「ラジャつす！」

「よし」

マツを残して扉を開く泥棒のプロこと『武藤治』。

ゆっくりと開かれた立ち入り禁止部屋に警戒しながら入つて行く。

彼の目の前には無数の銀色のメダルが溢れていた。噂に聞いた通りだとニヤリと口の端を上げる治。

その場にしやがみこみ、銀色のメダルにライトを照らす。

「……へへ、これだこれだ。海外で見つかつたと言われる埋蔵金。これさえ売り飛ばせば俺達は大金持ちだ」

あまり長居をしていても夜が明けられたら困る。

治は持参した大きな鞄にメダルを次々と入れて行く。

「ん？何だありや」

銀色のメダルが溢れている中、奥の方に正方形の宝箱のような古びた箱が置いてある。

中に何かある、いや、もしかしたらもっと凄いものが！

治は鞄を投げ出し、その箱へ向かつて行く。

いや、まるで惹かれるように誘われるよう、箱へと。

『……おお、復活……欲望』

ズズズと徐々に押し出されて行く蓋。

古風の錆びた音が部屋に響き、中身が現れて行く。

……欲望、欲望。

まるで何かに取り憑かれたようにぶつぶつ眩き、遂には蓋が床に落下し、カラカラと左右に揺れた。

そして、開けてはならない欲望の象徴が姿を現す。

床や治の鞄から無数の『セルメダル』が空中に舞う『コアメダル』へと集中し、人の姿へと変わつて行つた。

いや、人では無く、その姿は……

「あ、あれ？俺は何を」

『礼を言うぞ、褒美を受け取れ』

二つの血しぶきが天井を真つ赤に染めていく。

この世に解きはなれたのは人よりも恐ろしい存在。

この世に出ることはなかつた筈の存在。

「ほう、知らない内にこの世界もすっかり変わったものじやな」

「確かに、力不足ですわね……」

「まあいい、とりあえずは復活出来たのだからな」

人の形をしていたメダルの塊はその姿を変え、異形となる。だがその姿も力も不完全。

四人の化物は美術館の壁を破壊し、外へと出ていく。が、其処には既に黒いバイクに跨つた男性が銃を構えていた。

銃から弾丸が異形に飛び、火花を散らす。異形は微動だにしない。

男性はトランシーバーのような物で連絡を取る。

「予定道理グリード覚醒。次の指示をお願いします」

『殲滅』

「了解」

——始まつてしまつた。

異変を感じ取り、遠くを眺める少女。
自分がこの地に蘇り分かつてはいた。

まさか、まだ集まつていない時に。

少女は小さな拳を握りしめ、決意したように唇を噛みしめた。

「アストレ。この世界でも始まるようです。人とグリードの世界が」
見つけなくてはならない。

この世界の運命を左右する力を。

少女は赤いメダルを握りしめ、『失われたメダル』を探すべくその場から去つて行く。

鴻上ファウンデーションは文月町の中でもトップクラスの成績を誇る会社であり、裏

ではコアメダル、グリードなどを研究している。

その会長である鴻上は、グリードの復活を予期し、そしてコアメダルの謎さえも知つてゐる謎多き人物。

ビルの最上階から聞こえる高らかな声は鴻上のものだ。

秘書である里中はソファーに座つたまま、ノートパソコンをしげしげと眺めてから一言。

「ライドベンダー隊は全滅。コアメダル覚醒を阻止することは出来なかつたようです」

「そうか、だが、彼らの復活はそう残念なものでも無いようだ」

「と言うと？」

「里中君。この世の全てのものには誕生があるのだよ。素晴らしい!!彼らの誕生もまた、世界にとって大きな影響を与えるだろう!」

鴻上は古いレコードを回し、先ほどまで作つていたケーキのデコレーションへとかかかる。

レコードからは誕生日を祝うあの曲が、アルトの声で部屋中に響いている。

里中は鴻上から視線を離すと、何事も無いかのように再びパソコンへと視線が戻る。

『HAPPYbirthday、HAPPYbirthday』

「ラララ～ララ～」

流れる曲に合わせ愉快に歌い始める鴻上。

丁寧にホイップクリームを絞り、周りのデコレーションが完成。チヨコクリームで真ん中に文字を刻む。

『HAPPY birthday デイア～』

「グリーネード」

『HAPPY birthday to you～～～!!!』

祝おうじやないか。

この素晴らしい日を。

グリードという名の欲望の化身の誕生を。

HAPPY birthday!!! HAHAHAH!! 素晴らしいいい!!!

吉井明久は文月学園に在学中の二年生Fクラス。

振り分け試験によつて区別されたFクラスはAクラスと違つて、最低辺のクラス。まさに最下位、馬鹿が集まつたクラスとも言える。

吉井明久はFクラスの中でも群を抜くキングオブバカであり、またを観察処分者。彼は友達の為、そして設備を手に入れ、平穏な暮らしづする為、悪友の坂本雄二と共に

に打倒Aクラスを目指していた……のだが……。

そのAクラスについて昨日、敗北したばかりである。主に明久、雄二の努力不足でもあるが。

「……やっぱり昨日の映画が響いたなあ。……食費が益々減つて行くよ」

財布を覗けば、目を離したくなる現実に吉井明久はうなだれていた。

これではプレンシユガード所かハードボイルドにコーヒーも飲めない。

明久は財布をしまうと、重い足取りで街を歩く。

「……不味いな、バイトを探さないと今日は砂糖を水に溶かして食べないとならないぞ」

正しくは飲むだが……、砂糖に水は自爆行為でもあるのでみんな真似しないでね☆
と、まあそんなことを考へる程追いつめられている明久はバイトを探して食費を稼ぐ

べく今日は出掛けた。

「探すにしてもなるべく時給が高い場所じゃないと……、今週は話題のP.N.Pから恋愛ゲームも出るしね！」

明久の脳内では、ゲーム>食費…、詳しく述べばギャルゲー>食費という残念な頭になつていて。

おい、食費はどうした明久。

「それについても……休日だからかな？ カップルが多い……」

周りを見渡せば、いちやいぢやしているカツプルがちらほら見られる。

明久は現在恋人が居ない（モテる癖に鈍感だから）。昨日の姫路達との映画も彼の中では食費減少のイベントだと思つてゐるだろう。ついでにお嬢さんに行けなくなつたが。「やっぱり僕らの年代つて恋愛が多いのかな。そりや、僕だつて……恋人欲しいけどさ」言つて悲しくなつて来た明久はさつさとその場から去る。

大体バイトを探しに今日は來た訳で、カツプルに無駄な嫉妬を抱いた所で虚しくなるだけだ。

噴水を外れ、角が見える。

確か、この奥におすすめのバイト場所があると秀吉から聞いたのだ。実際、同じクラスの親友、木下秀吉も働いているらしく、明久は紹介して貰つている。

だが、自分に合うかは分からない。

「ま、一応候補の一つなんだし……それに秀吉が働いているなら行くしか無いじゃないかー！ん？……！」

「きや！？」

「ぶつ！？」

先ほどまでの暗いテンションは何処へやら。

明久はスキップをしながら角を曲がろうとすると、何かにぶつかつた衝撃で後ろに倒

れた。

「痛たた……あ！大丈夫？」

「……っ」

頭を押さえながらぶつかつた相手に手を差し出す明久。目じりに涙を溜めている赤い瞳とぶつかつた。

……女の子。

見た目からして同年代……。

しかも、かなりの美少女だ。

「…………」

「……何じろじろ見てるんです？」

「あっ、えと……いや、これは別にやましいとかぶげら!?」

「近づかないで下さい」

会つて一分も経たない内に明久は相手から鳩尾にパンチを喰らつた。ある意味で凄い事だが、色々と理不尽だ。

美少女は肩にかかる金色の髪を払い、くるりと背を向ける。

「……私とあなたにまだ接点があるとでも？」

「……私とあなたにまだ接点があるとでも？」

「え、接点？いや、僕はただ、ぶつかってしまったし……怪我は無いかなって」

「お人好しへすね。馬鹿ですか？」

「ついに初めて出会つた人からも馬鹿つて言われたあああ!?」

ガクリと膝を付く明久。

*shock*と言う単語が明久の頭に落下し、頭を抱え込む。

身内からも馬鹿つて言われてるのか……、少女は、はあと小さくため息をつくと明久に近寄り、手のひらに飴を置いた。

「強く生きるんですよ？」

「絶対馬鹿にしてるだろおおお!？」

「まさか」

「……顔が笑つてますよ？」

「うるさい！」

「ごふ?」

アツパークットが綺麗に決まり、明久はノックダウンするように地面へ倒れた。

ふん、鼻を鳴らしながら再び背を向ける少女。

涙を流している明久を置いて、そのまま街中へと消えて行つた。

「うう、……なして……」

出会つて五分も経たない内に見知らぬ相手を怒らせる。

ある意味で明久は凄かつた。悪い意味で。

悪気なんて無いのにと呟き、トボトボ歩き出す。

と、何かにコツンとぶつかり、ふと、足元を見ると、小銭のように音を立てながら転がつて行く。

「もしかしてさつきの娘が落としたのかな?とにかく、追いかけないと!」

……案の定、明久の読み通り、明久が落とし物を追いかけているとは知らず、持ち物が無くなつていた事に気づいた少女は慌てていた。

「うう、あの時落としたんだわ……あ……もしかしたらあの男が!」

踵を返し、少女は街中から再び彼と接触した場所へと走つて行く。

しかし、その場所には既に明久は居ないのだが……。

落とし物を追いかける明久を追いかける少女。追う側と追われる側……。明久は見事に中間に属している。

「……あの男、……どうしてくれましよう」

正し、明久は命の危機を表している。

少女から燃やしてやろうと言いたいが如く光が真っ赤な瞳から発していた。
が、すぐに首を振り、少女は自分のミスに大きくなため息を吐いた。

すこし重い足取りは明久の方へと向かう。

「う、何か悪寒が」

明久は一度身震いをしてから、さつき拾ったメダルを透かすように眺める。

真つ赤なメダルには鷹の絵が彫られている。

奇麗かつ謎の魅力が伝わってくる。

そう、惹かれる何かが

「見たことの無いコインだな、外国のお金かな？」

だとしたら早く届けなくちゃ、あの性格だ。

明久はメダルを握りしめ、もと来た道へと戻っていく。

わずかに汗が額に滲み、焦りが募る。

早く返さなきや殺される!!」

「どういう思考回路しているんです」

「どういう意味です!?」

「うう、は、腹が」

ナイスクリューパンチを腹部に受け、明久はよろよろと膝を付く。
あ、やばい。これは本当に殺される。

こういう場合は、美波との恒例イベントで得た方法で。

「樂にお願いします」

「……はあ」

「溜息つかれた!? 何で!?

「本当に馬鹿ですね。あなた」

「やめて!! これ以上苦しめないでえええ!!」

体をくねくねしながら悶える明久。

少女の口端が自然と上がった。

面白い人……。

「うう、そうだ。はい」

「あ」

明久は少女にメダルを渡し、ニッコリとほほ笑んだ。

元々これを返してもらう予定が、彼の馬鹿さについ所要を忘れかけていた。

明久もこれを返す予定だったのだが、勝手に自爆。

が、お互いに悪人じやないのは確かのようで、互いに警戒心を解く。

「僕は吉井明久」

「シエルです」

「そつか、よろしくねシエルちゃん」

「あのちや、ちゃん付けはちょっと」

「うーん、じやあ馴れ馴れしいけどシエルで」

「馴れ馴れしいですね。殴りますよ?」

「ごめんなさい」

即座に土下座の姿勢をとる明久。

おい、お前にはプライド無いんかい。

シエルはクスリと微笑み、明久の鼓動が跳ねた。

「冗談です。吉井さん」

「……」

「吉井さん?」

「あ、いや、えと、シエルつて「伏せて!!」むぐ!!」

シエルの叫び声と同時に明久は地面に倒れていた。

困惑する中分かることは一つ。

明久の顔に乗つかつてている二つの禁断の果実がマシュマロのように柔らかいことだ。

「ふぐ!!」

「大丈夫ですか吉井さん?」

「ふはつ、うん、色々と大丈夫じゃないかな」

「?、……それよりも」

「え?……!!」

絶句するしかない。

きっと何かのショージやないと思つてしまいそうだ。

だが、現に、現に、そこにある。

そう、あれはまさに

「変態だあああああああ!? 黄緑のコスプレっぽい変態がいるうううう」

「馬鹿! 逃げて!!」

『誰が』

「ゑ? うわああああ!!」

『誰が変態だあああ!!』

黄緑の怪物は明久に目掛け腕の鎌から斬光を飛ばし、明久はギリギリ横へ避ける。

先ほど立っていたアスファルトの地面が一瞬にして真っ二つに裂けていた。

呆然と立ちつくす明久に、怪物「カマキリヤミー」が飛び掛っていく。

「何だよ、これ」

「危ない!!」

『ぬうう!?』

「……シエル!?」

目の前まで迫っていたカマキリヤミーが赤い火の弾丸に弾き飛ばされ、我に返った明久。

後ろを振り返ると、右腕が鳥の翼が生えた赤いに変わっていたシエルが苦しそうに顔を歪めていた。煙が出ている、漕げすら見え、痛々しい。

「シエル?」

「逃げてください!」

「そんな!?君はどうするんだよ!」

「……私は見ての通りです。大丈夫、使命を果たすまでは、うう」

「その怪我じゃ無理だよ……」

明久にも分かる。

彼女に不思議な力があつても、負傷した腕じや、 いずれ。

こんなの、認めるか。

拳を強く握り締め、明久は近くに転がっていた折れたパイプを掴み、シエルの前に立

つ。

『何だ貴様』

「こいよ、僕が相手だ」

「駄目!! 生身の人間が適う相手じゃ」

「そんなのやつてみないと分からぬだろ!! うおおおおおお」

力マキリヤミーへ向かつて走り出す明久。
飛んでくる斬光の動きを読み取つてステップを踏みつつ、カマキリヤミーの懷へと入
る。

驚くカマキリヤミーをよそに明久はパイプを思い切り振り下ろす。

パイプだけが二つに折れ、体が宙を舞つていた。

「ぐわ!!」

『雑魚が邪魔をするな。シエル、メダルを渡せ』

「まだまだああ!!」

『うざい』

『がふ!?』

ハイキックを受け止め、回転を掛けながら明久を投げ飛ばし、フエンスへ体を打ちつ

ける。

シエルが慌てて駆け寄ると、明久は尚も立ち向かおうとしている。

何故？

何故そこまでするの？

「まだまだ……」

「吉井さん、どうして其処まで……だつてあなたには」

「関係あるよ」

「え？」

「だつて、シエルは今日であつた長い付き合いだし」
ニツと微笑む明久。

……そうか、彼は馬鹿じやなくて。

どうしようもない。

反論のしようがない大馬鹿なんだ。

彼になら……いやか彼にしか。

「吉井さん。助かる方法がひとつだけあります」

「ホント!？」

「ただし、多少の r 「それなら早く言つてよ!」人の話を、言つたつて無駄か」

シエルは明久に正方形状の石を腰の部位に当て、一瞬にしてベルトへと変わる。

三つの穴。青い色をしたそれに驚き慌てて立ち上がる明久に追いかけてきたカマキリヤミーが驚く。

「封印の」とか「ただでは」など言っているがガン無視。

「その三つの穴にこのメダルを填めてください。力が手にはあります」

「タカ、トラにバツタか」

「へ？ ま 待つてください！ 順番が違います！」

「え？ ジやあ、こう？」

「違います！！ どうしてバツタが一番右何です？」

バツタ、タカ、トラ……確かに填めろと言われたが、これは色んな意味で不味い。

いや、力すら手に入らない、うん。

タカ、バツタ、トラと填めた明久にパンチをかまし、ため息をつく。

「明久さんレベルに合わせない私が馬鹿でした。右からタカ、トラ、バツタです」

「さりげなく罵倒してない！……まあいいや、はあ、どうして僕は巻き込まれるんだろう

ね」

ニヤリと笑い、高くメダルを弾く。

その間に、トラ、バツタを填め、落下してきたタカをキヤツチすると、勢いのまま穴

へ填め、三つの穴が埋まつた。

シエルはベルトの腰の右側に付いていた円状のスキヤナーを取り外し、明久に手渡す。

「これでメダルをスキヤンしてください」

「……よし」

『やめろ!!』

言われるままにスキヤナーで読み込む。

そしてお決まりの――

「変身」

〈タカ！トラ！バツタ！〉

〈タ・ト・バ！タトバ！タ・ト・バ！〉

明久の周りを回っていたメダルから頭、体、足とベルトに填めたメダルの紋章が現れる。

それらは重なり合い、一つのサークルになり明久の体に刻まれる。

奇妙な歌が流れ終えた時には、明久の姿は黒いつなぎに先ほどのサークルが胸に、赤い頭部、爪のある腕、緑のラインが入った足。

三つのメダルから異なる姿に変わる戦士、仮面ライダーへ変身していた。

「うわ!?なんだこれ、タカ、トラ、バツタつて
「歌は気にしないでね☆こほん、それはオーツ。どれほどのものかは……」

『キエエエ!!』

「戦つてみれば分かります」

「ちょ!つ」

両腕をクロスし、カマキリヤミーの鎌を防ぐ。

オーツはカマキリヤミーの鎌を押し返し、右腕で顔面を殴りつけ、怯んだ所へ左で殴る。

カマキリヤミーは唸りながら下がり、オーツは右腕のクローを展開し、鋭利な爪が真下からカマキリヤミーを切り裂き、吹き飛ばす。

「すごい！体の中に力が溜まつてくるーー!!」

溢れんばかりの力に驚きながらも、オーツは自分のマスクや体をペタペタと触る。
この姿、このパワー……最高だ！

タカアイでカマキリヤミーの動きを読み、鎌を受け止め、回し蹴りを脇腹に打ち、のぞけつた所へ、拳を下から振り上げアッパーが決まる。

『く、調子にぐあ!!』

「は！つしゃああ！」

オーズの蹴りの攻撃の猛襲に悶えるカマキリヤミー。

ベルトから緑のラインドライブが足に吸收され、オーズはバツタのように瞬発的に跳びながら、連續でカマキリヤミーを痛撃。

カマキリヤミーの体から、セルメダルが零れ落ちた。

「よつと。うわあ、すごいやこれ！」

『メダルを渡せええええ』

「わ、ぐ！ がつ……」

カマキリヤミーは鎌で斬り掛り、横に避けたオーズの腹部を蹴り込み、怯んだ瞬間に鎌を何回も振り回し、ダメージを負ったオーズは火花を散らしながら吹き飛ぶ。

地面を転がり、倒れたオーズの体にバリバリと雷が走り、トラメダルが地面へと落ちた。

「な、なんだ？」

「相性が悪いですね……吉井さん真ん中をこれに変えてください！」

『!!、シエル、メダルを「邪魔」ぐお！』

「えっと、確か」

カマキリヤミーを蹴飛ばし、シエルから投げ渡されたメダルを真中に填める。

ベルトを傾け、スキヤナーで読み込むと、体の部位が緑色のカマキリアームに変化する。

「タカ！ カマキリ！ バツタ！」

「わ、これってソード？」

『メダルを』

「よし、行くぞ!!」

カマキリアームから形成された二つのソードを構え走り出す。

FFF団や鉄人との死をかけた戦争に幾度となく勝ち残つたバトルセンスと磨かれた身体能力も含め、オーズは飛んでくる斬光を次々と弾き、かわし、ヤミーの懷へ入り、高速でソードを切りつけ、火花が散つていく。

反撃の隙を与えないスピードにシエルもポカーンとしている。

「りやあああ！」

『ぬぐあ、うう』

「これで、どうだ！」

『ぐああああああああ!!』

オーズの振り下ろした一撃にカマキリヤミーは耐え切れずに吹き飛ばされる。オーズはすぐに距離を詰め、カマキリアームに力を溜め、高く飛びあがつた。

「だっしやあああ!!」

『ぬ、ああああああああ!!』

ゆつくり立ち上がるカマキリヤミーの目の前に現れたオーズ。カマキリアームでクロスするように切り裂き、カマキリヤミーは悲鳴を上げながら爆散し、大量のセルメダルが飛び散った。

着地した明久に散ったメダルが霰のように落ちる。

——認めないと言いたいよに。

「いたたたた!? ちよ、なんで!?

「なに馬鹿やつてるんです? 更に馬鹿になりますよ?」

「それって既に馬鹿つてことだよね!?」

「……自覚なかつたんですか?」

「ちくしょーー!!」

オーズの姿で○rZのポーズを取る明久。

シエルはクスリと笑つていると脳裏に自分を庇うように立つたあの姿が蘇る。ボツと頬が染まり、悟られないように後ろを向く。

(……そんな筈ありません、あんな馬鹿な人を気にするなんて)

「ねえ、シエル」

「はひ!?」

「これってどうやつて戻るの?」

「……(やはり、ありえませんね)」

カウントザメダルズ

タカ

トラ

カマキリ

バツタ